

学習支援センター開設直後の利用に関する報告

A report of the use immediately after Study Support Center establishment.

太田 伸幸
Nobuyuki OTA

Abstract This paper reported the use of Study Support Center established in April, 2003. Investigation 1 was conducted in April immediately after the establishment. 198 students were asked a question about the degree of cognition of Study Support Center, and a student's cognitive tendency. Almost all students didn't visit there though they knew such a center had been opened. In addition to the questions about curriculum, students wanted to know how to get various qualifications in their fields and how to find jobs. From analysis of a student's cognitive tendency, it was suggested that the student who has not interesting in their study feel their university life unattractive. Investigation 2 was conducted in September. 156 students were measured about the use of Study Support Center, and a student's adaptation to university. The rate of the student who uses the center was low, and the consultation concerning study was almost the case. It was suggested that apathy mentality is high affects their passivity.

1. はじめに

大学生の学力低下が言われるようになり、学生のリメディアル教育（補習教育）を行なう大学が増えてきた。リメディアル教育とは、大学で学ぶために必要な学力が不十分な学生に対して、高等学校の学習内容を再学習させるために行なわれる教育カリキュラムのことを指す。本学では、入学前補習（数学・物理）、1年前期の基礎数学、化学基礎の開講などが、このリメディアル教育にあたる教育カリキュラムとなる。

本学では、平成 15 年度より学生支援本部が発足した。そして、学生の学習活動への支援を目的として学習支援センターが設立された。同様の施設は他大学にも設置され始めているが、活動内容はいまだ探索的であり、大きな成果を挙げている例は少ない。本稿では、今後の学習支援センターの活動方針の参考にすることを目的として、学習支援センターの開設直後の利用に関する調査を行なった結果を報告する。

2. 調査 1

2.1 目的

学習支援センター開設直後の学生の認知度と、および学生の認知傾向について検討する。

2.2 方法

2.2.1 調査時期

4月11日1,2,6限, および4月16日1限の講義時間の一部を用いて実施した。いずれも総合教育科目「この科学」の初回講義にあたる。

2.2.2 調査対象

上記講義初回出席者 198 名を調査対象とした。学年の内訳は 1 年生 150 名, 2~4 年生 48 名であった。

2.2.3 調査内容

学生の認知傾向に関する尺度と、学習支援センターに関する質問から構成される調査用紙を作成した。

(1) 学生の認知傾向に関する尺度

a. 学習動機尺度 (36 項目) : 市川 (1995) が作成した、学習意欲の 2 要因モデルに基づく学習動機尺度を使用した。充実志向 (学習自体が楽しいから勉強する傾向)、訓練志向 (知力を鍛えるために勉強する傾向)、実用志向 (仕事や生活に生かすために勉強する傾向)、関係志向 (他者につられて勉強をする傾向)、自尊志向 (プライドや競争心から勉強する傾向)、報酬志向 (報酬を得る手段として勉強する傾向) の 6 つの下位尺度から構成される。「全く当てはまらない(1)」~「全く当てはまる(5)」の 5 件法で回答を求めた。

b. 認知欲求尺度 (15 項目) : 神山・藤原 (1991) が作成した、認知欲求尺度を使用した。普段からどれだけものごとをよく考えたり、それを楽しんだりする動機づけ

の高さを測定する。「全くそうでない(1)」～「非常にそうである(7)」の 7 件法で回答を求めた。

c. 達成動機測定尺度 (23 項目) : 堀野 (1987), 堀野・森 (1991) によって作成された達成動機尺度を使用した。自己充實的達成動機 (自分自身にとって価値のあることを成し遂げようとする欲求) と競争的達成動機 (社会的・文化的に価値があるとされることを成し遂げたいとする欲求) の 2 側面から測定する。「全然当てはまらない(1)」～「非常によく当てはまる(7)」の 7 件法で回答を求めた。

d. 大学生生活不安尺度 (29 項目) : 藤井 (1998) が作成した大学生生活不安尺度を使用した。大学生が大学生活において感じている不安の種類や水準を測定する。日常生活不安, 評価不安, 大学不適応の 3 側面から測定する。「はい」か「いいえ」の 2 件法で回答を求めた。

(2) 学習支援センターに関する質問

a. 学習支援センターの利用経験: 学習支援センターの開設を知っていたか否か, 利用経験があるかについて質問した。

b. 今後の利用予定: 今後の利用予定について「よく利用する」「時々利用する」「必要があれば利用する」「ほとんど利用しない」「まったく利用しない」から選択を求めた。

c. 相談内容: 学習支援センターにて相談する内容について, 当てはまるものを全て選択させた。項目としてあげられていない内容については自由記述を求めた。

2・3 結果と考察

2・3・1 利用経験と今後の利用予定について

まず, 学習支援センターの開設を知っていたかどうかについて回答を求め, 「知っている」と回答した学生にさらに利用したことがあるかどうかについて回答を求めた (Table1 参照)。新学期が始まった直後であるが, 新入生・上級生共に約 8 割の学生が学習支援センターの開設を知っていた。しかし, 利用経験となると, 約 1 割の学生しか「利用したことがある」と回答していなかった。

Table1 学生支援センターの利用経験

	1年生	2~4年生	計
知っていた (利用した)	120 (15)	40 (6)	160 (21)
知らなかった	30	8	38
計	150	48	198

()内は内数

Table2 今後の利用予定

	よく利用 する	時々利 用する	必要があ れば利用 する	ほとんど利 用しない	まったく利 用しない
利用経験あり	3	5	13	0	0
利用経験なし	0	14	128	17	18

今後の利用予定については, 利用経験のある学生は「よく利用する」から「必要があれば利用する」までを選択しており, 逆に利用経験のない学生は「時々利用する」から「まったく利用しない」を選択していた (Table2 参照)。利用経験のある学生の方が, 積極的に学習支援センターを利用する意識の現われと考えられる。

2・3・2 相談内容について

学習支援センターでの相談内容と考えられる項目を 11 項目あげ, それぞれについて回答を求め, 1 年生, 上級生に分けて項目ごとに選択率を算出した (Table3 参照)。1 年生よりも上級生の方が選択率の高かったのは「資格取得」, 「就職」, 「進学」など, 将来の進路に関する項目であった。1 年生の方が上級生よりも選択率が高かったのは「授業」, 「学習方法」, 「履修方法」など, 大学での学習活動に関する項目であった。また, 「大学生活」, 「日常生活」など学生生活に関する項目も 1 年生の方が選択率が高かった。「資格取得」も半数近くの学生が相談項目としてあげており, 将来の就職に関する意識が高いと考えられる。

なお, 「対人関係」, 「心の悩み」など, 学生相談に関する相談内容については 1 年生, 上級生とも選択率が低かった。学習支援センターでの相談システムが不明確であることが影響したとも考えられる。

Table3 相談内容

	全体	1年生	上級生
授業	96 (48.5%)	84 (56.0%)	12 (25.0%)
学習方法	64 (32.3%)	58 (38.7%)	6 (12.5%)
履修方法	72 (36.4%)	65 (43.3%)	7 (14.6%)
教職課程	9 (4.5%)	6 (4.0%)	3 (6.3%)
資格取得	110 (55.6%)	76 (50.7%)	34 (70.8%)
就職	94 (47.5%)	65 (43.3%)	29 (60.4%)
進学	38 (19.2%)	27 (18.0%)	11 (22.9%)
大学生生活	39 (19.7%)	35 (23.3%)	4 (8.3%)
日常生活	22 (11.1%)	20 (13.3%)	2 (4.2%)
対人関係	10 (5.1%)	9 (6.0%)	1 (2.1%)
心の悩み	16 (8.1%)	13 (8.7%)	3 (6.3%)

2・3・3 学生の認知傾向に関する尺度について

大学生生活不安尺度のみ下位尺度ごとに「はい」と回答した項目数を尺度得点とし, 残りの尺度は下位尺度ごとに平均評定値を算出し尺度得点とした。1 年生と上級生にわけて, 下位尺度ごとに t 検定を行なったところ, 「充実志向」「訓練志向」で傾向差, 「自己充實的達成動機」

Table4 測定尺度の平均と標準偏差

	全体		1年生(n=150)		上級生(n=48)		t値
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
充実志向	3.41 (0.64)		3.37 (0.62)		3.55 (0.68)		-1.66 +
訓練志向	3.07 (0.66)		3.02 (0.63)		3.21 (0.73)		-1.67 +
実用志向	3.72 (0.63)		3.68 (0.65)		3.85 (0.57)		-1.62
関係志向	2.51 (0.73)		2.52 (0.74)		2.49 (0.71)		.24
自尊志向	2.62 (0.81)		2.60 (0.76)		2.69 (0.95)		-.62
報酬志向	2.58 (0.68)		2.58 (0.64)		2.59 (0.80)		.11
認知欲求尺度	4.16 (0.86)		4.11 (0.84)		4.31 (0.91)		-1.44
自己充實的達成動機	5.09 (0.84)		5.01 (0.82)		5.36 (0.85)		-2.55 *
競争的達成動機	4.65 (0.89)		4.56 (0.87)		4.92 (0.90)		-2.39 *
日常生活不安尺度	7.24 (3.16)		7.43 (3.23)		6.64 (2.88)		1.50
評価不安尺度	6.93 (2.97)		7.12 (2.95)		6.35 (3.01)		1.53
大学不適応	1.04 (1.38)		0.93 (1.33)		1.39 (1.50)		-1.98 *

+p<.10 *p<.05

Table5 学生の認知傾向に関する尺度の尺度間相関

	MOTI1	MOTI2	MOTI3	MOTI4	MOTI5	MOTI6	COG	SF	CP	ANX1	ANX2	ANX3
充実志向(MOTI1)	-	.648 ***	.552 ***	.042	.313 ***	-.037	.597 ***	.599 ***	.307 ***	.035	.043	.012
訓練志向(MOTI2)		-	.533 ***	.305 ***	.450 ***	.183 *	.354 ***	.394 ***	.286 ***	.155 *	.210 **	.063
実用志向(MOTI3)			-	.144 *	.265 ***	.191 **	.261 ***	.390 ***	.388 ***	.169 *	.149 *	-.035
関係志向(MOTI4)				-	.645 ***	.593 ***	-.162 *	-.066	.254 ***	.363 ***	.384 ***	.127 +
自尊志向(MOTI5)					-	.632 ***	.051	.143 *	.541 ***	.333 ***	.353 ***	.142 *
報酬志向(MOTI6)						-	-.237 ***	-.160 *	.393 ***	.380 ***	.325 ***	.143 *
認知欲求尺度(COG)							-	.501 ***	.032	-.220 **	-.204 **	.004
自己充實的達成動機(SF)								-	.406 ***	-.095	-.077	-.093
競争的達成動機(CP)									-	.192 **	.177 *	.138 +
日常生活不安尺度(ANX1)										-	.732 ***	.087
評価不安尺度(ANX2)											-	.078
大学不適応(ANX3)												-

*p<.10 **p<.05 ***p<.001

「競争的達成動機」「大学不適応」で有意差が認められた (Table4) . 上級生の方が意欲的である反面, 大学不適応の状態が新入生より高いことがわかる.

また, 大学生生活不安尺度の得点を藤井 (1998) の結果と比較すると, 日常生活不安と評価不安は, 藤井 (1998) が2,3年の女性でのみ6点を越えていたのに対し, 本学の学生は7点前後と高い得点を示している.

次に各尺度間の相関係数を算出し Table5 に示した. 学習動機の各志向性と他の尺度との関連を見ると, 学習内容を重視する学習動機 (充実志向, 訓練志向, 実用志向) と「認知欲求尺度」, 「達成動機」との相関が有意であった. このうち, 競争的達成動機は学習内容を軽視する学習動機 (関係志向, 自尊志向, 報酬志向) との相関が有意であったが, 他の2尺度とは有意な相関が見られなかったり, 有意であっても低い相関値であったりした. すなわち, 学習内容を重視する学生は「認知欲求」や「自己充實的達成動機」など, 積極的に学習する姿勢が見られるが, 学習内容を軽視する学生はあまり学習姿勢とは関連しないと考えられる. また, 「大学生生活不安尺度」との関連では, 学習内容を軽視する志向性と「日常生活不安」や「評価不安」との相関が有意であった. 学習内容を重視しない学習動機が高い学生は, 大学生生活や評価

に対する不安が高まることが示唆されたと考えられる. また, 「認知欲求尺度」と「自己充實的達成動機」との間に正の相関が, 「日常生活不安」, 「評価不安」との間に負の相関がそれぞれ認められた. すなわち認知欲求が高いと自己実現に向けた動機が高まり, 大学生生活に対する不安を抑制する方向に作用するのであろう.

2・3・4 調査1まとめ

相談内容の結果から, 他部署の業務と一部重なる内容も相談内容として考えられていることが明らかとなった. 履修方法は教務課, 資格取得はエクステンションセンター, 心の悩みなどは学生相談室が担当しているが, こうした部署との連携を持ち, 学習支援センターとしての活動を考える必要があるだろう. 例えば, 履修方法について, 履修規則に関しては教務課の指示に従うとしても, 標準的な履修モデルの提示, 履修単位数の目安の指導, 上級生の時間割例などの掲示など, 学習プランの立て方の指導は可能であると考えられる.

また, 学生の認知傾向に関する尺度の分析結果から, 学習動機として, 学習内容をあまり重視しない学習動機を持つことが大学生生活に対する不安に作用することが示唆された.

3. 調査 2

3・1 目的

前期における学習支援センターの利用実態, および学生の大学適応傾向について検討する。

3・2 方法

3・2・1 調査時期

9月24日1,2限, および9月26日1,6限の講義時間の一部を用いて実施した。いずれも総合教育科目「こころの科学」の初回講義にあたる。

3・2・2 調査対象

上記講義初回出席者 156 名を調査対象とした。学年の内訳は 1 年生 84 名, 2~4 年生 72 名であった。

3・2・3 調査内容

(1) 学生の適応傾向を測定する項目

a. アパシー心理性格尺度 (15 項目) : 下山 (1995) が作成した, アパシー心理性格尺度の下位尺度のうち, 「適応強迫」の項目を除いた「張りのなさ」, 「自分のなさ」, 「味気なさ」に関する 15 項目を用いた。「張りのなさ」は生活の張りがなくなっている状態を, 「自分のなさ」は自己不確実な心理状態を, 「味気なさ」は生活全般に味気なくなっている心理状態をそれぞれ示す。

b. 意欲低下領域尺度 (15 項目) : 下山 (1995) が作成した, 意欲低下領域尺度を使用した。学生生活の領域ごとに学生の意欲低下を測定する。意欲低下領域として, 学業成績に関する意欲低下, 授業に関する意欲低下, 大学に関する意欲低下の 3 領域がある。

c. 充実感尺度 (9 項目) : 角谷・無藤 (2001) が作成したおもに対人的な充実感に関する項目を採用した。a~c の各項目に対しては, 「当てはまらない(1)」~「当てはまる(5)」の 5 件法で回答を求めた。

d. ソーシャルスキル尺度 (18 項目) : 菊池 (1988) が作成した KiSS-18 を使用した。「いつもそうでない(1)」~「いつもそうだ(5)」の 5 件法で回答を求めた。

e. 大学生生活不安尺度 (29 項目) : 藤井 (1998) が作成した大学生生活不安尺度を使用した。大学生が大学生活において感じている不安の種類や水準を測定する。日常生活不安, 評価不安, 大学不適応の 3 側面から測定する。「はい」か「いいえ」の 2 件法で回答を求めた。

(2) 学習支援センターに関する質問

a. 学習支援センターの利用経験: 前期の間に学習支援センターを利用したかどうかについて回答を求めた。

b. 利用目的: 学習支援センターを利用したことのあ

る学生に対して, 利用目的を尋ねた。回答は選択肢から当てはまるものを全て選択させ, 選択肢にない場合はその他として自由記述を求めた。

c. 利用しない理由: 学習支援センターを利用したことのない学生に対して, 利用しなかった理由を尋ねた。回答は選択肢から当てはまるものを全て選択させ, 選択肢にない場合はその他として自由記述を求めた。

3・3 結果と考察

3・3・1 前期における利用経験

前期の間に学習支援センターを利用したかどうかについての設問に対して「利用したことがある」と回答したのは 156 人中 21 人であった。これは調査対象者全体の 13.5% にあたる。さらに利用頻度において, 半数が 1~3 回ほどを選択していた (Table6 参照)。相談内容は学習に関する事柄がほとんどであった (Table7 参照)。

Table6 利用頻度

	人数
ほぼ毎日	0
週3~4回	0
週1~2回	0
月2~3回	0
1~3回ほど	12
受講登録期間	4
試験前	5

Table7 相談内容

	人数
授業	13
学習方法	3
履修方法	5
教職課程	0
資格取得	0
就職	0
進学	0
大学生生活	1
日常生活	1
対人関係	0
心の悩み	0

また, 利用経験のない学生に, 利用しない理由について尋ねたところ, 半数以上の学生が「質問・相談したいことがらがないこと」をあげており, 半数近くの学生が「学習支援センターの利用方法がよく分からない」ことをあげていた。自由記述にも「存在自体知らなかった」という記述が複数あり, 学習支援センターの存在は知っていても, その活動内容が学生に浸透していないことが推察される (Table8)。

Table8 利用しない理由

	人数
質問・相談したいことがらがない	88
センターに入りづらい	22
他部署や先生に直接質問に行く	9
開室時間が自分の予定と合わない	5
他の人がいる前で相談しにくい	6
センターまでいくのめんどくさい	36
利用方法が分からない	61
変な質問をして変わった学生と思われたくない	2

※「その他」として「存在を知らなかった」があった

3・3・2 大学適応感に関する尺度について

まず社会的スキル尺度に関して因子分析 (主成分分解, プロマックス回転) を行ない, 3 因子を抽出した。因子

Table9 大学適応感に関する尺度の平均と標準偏差

	全体(n=156)	1年生(n=84)	上級生(n=72)	t値
張りのなさ	3.39 (0.78)	3.46 (0.83)	3.30 (0.71)	1.31
自分のなさ	3.20 (0.94)	3.23 (1.03)	3.17 (0.83)	0.40
味気のない	2.41 (0.74)	2.50 (0.79)	2.30 (0.68)	1.66 +
学業意欲低下	3.23 (0.73)	3.29 (0.70)	3.15 (0.76)	1.19
授業意欲低下	2.62 (0.91)	2.60 (0.84)	2.65 (0.99)	0.37
大学意欲低下	2.91 (0.71)	2.93 (0.68)	2.89 (0.74)	0.32
充実感	3.12 (0.66)	3.07 (0.69)	3.17 (0.62)	0.98
日常生活不安	6.37 (3.12)	6.40 (3.44)	6.32 (2.73)	0.17
評価不安	5.63 (2.93)	5.79 (3.20)	5.45 (2.58)	0.72
大学不適応	1.34 (1.52)	1.14 (1.51)	1.56 (1.50)	1.74 +
うちとけやすさ	2.68 (0.91)	2.70 (0.96)	2.67 (0.86)	0.21
相互交渉スキル	3.10 (0.66)	3.10 (0.70)	3.10 (0.62)	0.01
仕事遂行スキル	2.96 (0.73)	2.83 (0.75)	3.11 (0.67)	2.46 *

+ p<.10 * p<.05

Table10 大学適応感に関する尺度の尺度間相関

	APA1	APA2	APA3	PASS1	PASS2	PASS3	FUL	ANX1	ANX2	ANX3	KISS1	KISS2	KISS3
張りのなさ(APA1)	-	.612 ***	.400 ***	.387 ***	.432 ***	.413 ***	-.468 ***	.353 ***	.267 ***	.271 ***	-.168 *	-.253 **	-.378 ***
自分のなさ(APA2)		-	.460 ***	.424 ***	.367 ***	.359 ***	-.573 ***	.391 ***	.443 ***	.217 **	-.269 ***	-.291 ***	-.436 ***
味気のない(APA3)			-	.174 *	.079	.455 ***	-.687 ***	.329 ***	.271 ***	.209 **	-.466 ***	-.523 ***	-.473 ***
学業意欲低下(PASS1)				-	.495 ***	.326 ***	-.331 ***	.123	.134 +	.275 ***	-.027	-.114	-.306 ***
授業意欲低下(PASS2)					-	.304 ***	-.158 +	.133 +	-.001	.339 ***	.114	-.116	-.053
大学意欲低下(PASS3)						-	-.442 ***	.220 **	.133 +	.236 **	-.438 ***	-.301 ***	-.209 **
充実感(FUL)							-	-.298 ***	-.301 ***	-.253 **	.497 ***	.534 ***	.558 ***
日常生活不安(ANX1)								-	.685 ***	.330 ***	-.138 +	-.177 *	-.237 **
評価不安(ANX2)									-	.210 **	-.045	-.173 *	-.355 ***
大学不適応(ANX3)										-	-.027	-.104	-.166 *
うちとけやすさ(KISS1)											-	.508 ***	.258 **
相互交渉スキル(KISS2)												-	.391 ***
仕事遂行スキル(KISS3)													-

*p<.10 **p<.05 ***p<.01 ****p<.001

負荷が複数因子に高い項目やどの因子にも低い項目の計3項目が除外し、第1因子「うちとけやすさ」(5項目)、第2因子「相互交渉スキル」(6項目)、第3因子「仕事遂行スキル」(4項目)と命名した。

大学生生活不安尺度のみ下位尺度ごとに「はい」と回答した項目数を合計し尺度得点とした。他の尺度は下位尺度ごとに平均評定値を算出し尺度得点とした。1年生と上級生にわけて、下位尺度ごとにt検定を行なったところ、仕事遂行スキルに有意差が、味気のないと大学不適応に傾向差が認められた(Table9)。上級生の方が行事の運営などを中心的にこなさなければいけない立場を経験しているためである。

「アパシー心性尺度」、「意欲低下領域尺度」、「充実感尺度」の midpoint は3であり、「張りのなさ」、「自分のなさ」、「学業意欲低下」が midpoint を越える値を示した。生活の張りのなさや確固たる自分をもてていないことを感じる傾向が伺え、学業意欲低下にその影響が及んでいるのかもしれない。しかし、「充実感」も midpoint を越えており、全く充実していないと感じているわけではないと考えられる。

次に、下位尺度間相関を算出し Table10 に示した。「アパシー心性」は「意欲低下領域」や「大学生生活不安」と

正の相関を、「充実感」や「社会的スキル」とは負の相関を示した。社会的スキルが高いと対人相互交渉がうまくできるため、対人関係が良好になりやすいといえる。「充実感」は「社会的スキル」以外の尺度と負の相関を示した。大学生活に対する不安や意欲の低下が充実感を低下させており、「社会的スキル」とは正の相関を示していることより、対人相互交渉がうまくできることが充実感を高めると考えられる。

4. 調査1と調査2の比較

4.1 学習支援センターの利用に関して

学習支援センター開設直後の調査では、その存在を知る学生は約8割であり、利用率は約1割であった。後期初めの調査において、前期の間に学習支援センターを利用した経験のある学生の割合は13.5%であり、前期の調査と比較して、利用率はほとんど上昇していない。すなわち、最初に利用した学生は利用するが、利用しなかった学生は全く利用しないという分化が生じていると考えられる。

また、利用目的に関して、調査1の相談内容では学習相談以外の内容も想定されていたのに対し、調査2の利用実績からはほぼ相談内容は学習相談に限定されてい

た. 利用しない理由として「相談したい内容がない」や「利用方法が分からない」を多くの学生があげており, 利用方法が不明確で, センターでどのような相談に応じられるのかを学生に理解されていないことがうかがえる. 利用方法・対応内容を明確にし, 学生の認知度を上げることが必要となるであろう.

4・2 学生の認知傾向と大学適応感に関して

調査1・調査2共に測定したのは大学生生活不安尺度のみであった. 「日常生活不安」と「評価不安」は, 調査1から調査2にかけて減少しているにもかかわらず, 「大学不適応」のみ調査2の方が高得点を示した. 4月は新入学・新学年の初頭にあたり, 新学年での生活に対する不安が高まっているためであろう. そして調査2は夏休み明け直後に実施したため, 夏休みの生活リズムから大学生活への再適応が不十分な状態であったためであると考えられる.

調査1において, 学習内容を重視しない学習動機を持つ学生は大学生生活不安が高いことが示された. 調査2では, 大学生生活不安はアパシー心性や意欲低下と正の相関が認められた. 学習内容を重視しない学習動機を持つ学生は, アパシー心性や意欲低下の得点が高いことが推測される.

5. 今後の課題

今回の調査対象となった学生は, 新入生全体の15%, および上級生の2.5%とかなり偏りがあるため, 本報告の結果がすなわち本学の傾向として当てはめることは難しい. しかし, このような調査(特に大学生生活不安尺度

など)を定期的実施することにより, 学生が抱えている問題点が明確になってくると考えられる. そうした結果が, 今後の学習支援センターの活動方針, 運営内容に反映されることと思う.

また, 調査が総合教育科目の講義時間において調査を実施したため, 上級生の調査対象者が少なく, 学年ごとの比較は行えなかった. 必修の授業等を利用した全教調査の必要があるかもしれない.

引用文献

- 藤井義久 1998 大学生生活不安尺度の作成および信頼性・妥当性の検討 心理学研究, 68, 441-448.
- 堀野緑 1987 達成動機の構成因子の分析—達成動機の概念の再検討— 教育心理学研究, 35, 148-154.
- 堀野緑・森和代 1991 抑うつとソーシャルサポートとの関連に介在する達成動機の要因 教育心理学研究, 39, 308-315.
- 市川伸一 1995 学習と教育の心理学 現代心理学入門 (3) 岩波書店
- 角谷詩織・無藤隆 2001 部活動継続者にとっての中学校部活動の意義—充実感・学校生活への満足度とのかかわりにおいて— 心理学研究, 72, 79-86.
- 神山貴弥・藤原武弘 1991 認知欲求尺度に関する基礎的研究 社会心理学研究, 6, 184-192.
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店
- 下山晴彦 1995 男子大学生の無気力の研究 教育心理学研究, 43, 145-155.

(受理 平成 16 年 3 月 19 日)